

# 自然と教育

第13号

2001年3月30日  
奈良教育大学  
自然環境教育センター



白毫寺町の大和棟民家例（筆者撮影）

## 目 次

岩本 廣美：大和棟民家移築・再生構想－奈良実習園における地域開放型大学セミナーハウスー……………	2
小柴 幸文：竹トンボ飛距離伸長の工夫……………	5
北川 尚史：定年後の田舎暮らし（1）動植物の観察……………	8
玉村公仁彦：「馬」と「鹿」の分布考－「探偵ナイトスクープ」を論じて、自然科学者のあり方に及ぶ……………	14
前田喜四雄：私のマラソン……………	18
編集後記……………	20

# 大和棟民家移築・再生構想

## — 奈良実習園における地域開放型大学セミナーハウス —

岩本 廣美

### 1. 構想のあらまし

奈良市白毫寺町にある当センター奈良実習園（以下「実習園」と記す）の敷地内または隣接地に、近在の伝統的大和棟民家を移築し、それを地域開放型大学セミナーハウスとして再生したうえで大学および近隣地域で活用していこう、というのがこの構想の骨子である。目的は、地域の文化遺産である伝統的民家を単に保存するばかりでなく、活用を図ることによってその価値を体験的に学生や地域住民などに広く理解してもらうことにある。

我が国では、伝統的民家を移築し野外展示している民家園は、日本民家再生リサイクル協会ホームページによると、全国に30か所設置されている。奈良県立民俗博物館の野外展示や世界遺産に指定されている岐阜県白川村の合掌造り民家園はその一例である。また、近在の伝統的民家を移築・活用している例は、筆者が実地に見た範囲では、愛知県足助（あすけ）町の三州足助屋敷が相当するが、足助町の場合は多分に景勝地に設置した観光客向け施設という性格が強い。筆者のいう大和棟民家移築・再生構想は、これらのいずれとも異なるタイプのものである。

他に例のないこの構想が実現すれば、本学や近隣地域にとってはもちろんのこと、我が国にとっても画期的事業となることは間違いない。大和地方は、後述のように明治期まで農村として我が国では先進地域だったところであり、その象徴ともいべき大和棟民家を移築・再生する意義は歴史的・学問的に見ても大きい。構想実現のためには、(1)該当する民家自体と所有者の理解・協力、(2)受皿となる土地及び法的認可、(3)移築・再生の経費、(4)再生後の維持・管理システムの確立、(5)活用方針およびカリキュラムの策定、の5条件すべてを満たす必要がある。いずれも現時点では研究課題であるが、その見通しや可能性、背景について以下述べる。

### 2. 大和棟民家の特徴と地域性

大和棟とは、大和地方すなわち奈良盆地および周

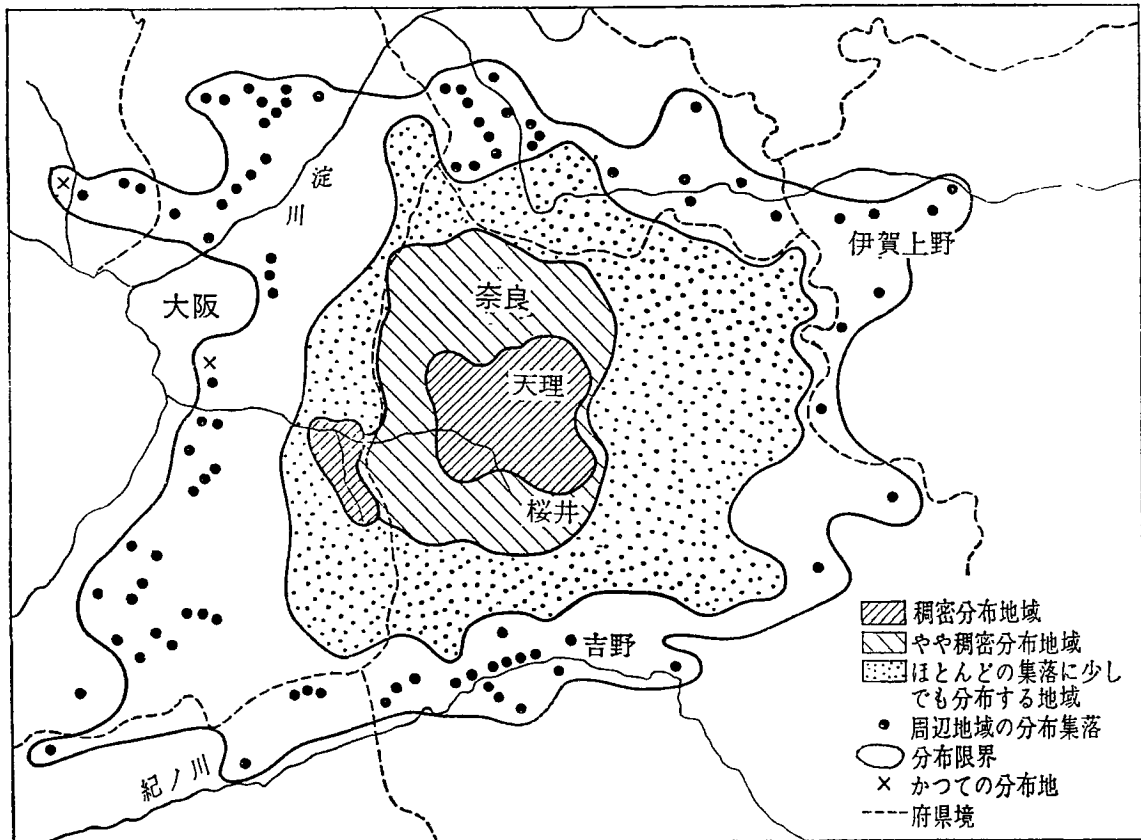
辺地域で現在も見られる（図参照）、屋根の形に特徴を持つ伝統的農家建築を指す呼称である。

大和棟は、屋根の高さおよび傾斜を段違いにしているのが特徴である。屋根の中心部分の傾斜を急勾配にして高く造り、その両側には緩傾斜の低い屋根を設ける形態である。ただし、これは典型的な場合であり、実際には多様な変形が見られる。

屋根を高く急傾斜にすることの意味は、岐阜県白川村の合掌造りの例では、階をいくつも設け、蚕室や道具類の収納スペースとして使用すると同時に、積雪対策であるとも考えられる。雪が大量に積もったままにならないようにする工夫である。しかし、積雪のほとんど見られない大和地方の場合は、夏の暑さ対策という側面があるようだ。住んでいる人の話を聞くと、屋根裏の空間を大きく取れば、土間の存在や風通しの良さも手伝って夏の暑さはそれほど苦にならないという。屋根裏の空間が断熱効果を発揮しているということになる。また、屋根裏スペースは居住用や蚕室には用いていないことから、やや贅沢な造り方であるともいえよう。

杉本尚次著『日本民家の旅』（NHKブックス、1983年）によると、大和棟は18世紀中頃から大和地方で取り入れられるようになった形態で、動機としては、暑さ対策というよりはむしろ上層農家が家格を示すためとのことである。しかし、結果としては、屋根を高くすることによって暑さがしのげることもあって、階層的、地域的に広範囲で受け入れられるようになったのではないであろうか。

大和地方は、江戸時代中頃からワタやナタネなど商品作物を生産する農業が他地域に先駆けて発展していった地域である。明治時代中頃まで、全国でも最も先進的農業地域であったといわれる。したがって、農家建築に大和棟が取り入れられるようになっていった背景には、生産性の向上によって財力を蓄えていった農家が多数生まれていたという事情があったといえよう。



大和棟の分布 (1957) (杉本尚次による)

### 3. 白毫寺町の大和棟群と実習園

大学キャンパスのすぐ南東方向に、715（靈龜元）年創建と伝えられる白毫寺がある。白毫寺が建つ高台の周辺に広がる集落が旧白毫寺村、現在の白毫寺町である。集落の南側には、都市化が進んだとはいえ、現在でもまとまった面積の水田が維持されており、白毫寺町には水田耕作を営む農家が約80戸ある。

この白毫寺町の旧集落では、10数戸の大和棟民家が健在である。いずれも見応えのある立派な民家ばかりである。元々の大和棟は藁（わら）で屋根を葺いていたと思われるが、さすがに藁葺き屋根は現在では見られず、藁をトタンで被った形態が多い（写真参照）。それでも、大和棟民家が次々に消滅していつている昨今の和歌山地方では、白毫寺町の旧集落は大和棟が最も残存しているところのひとつといえようである。集落全体が文化遺産といってもよいであろう。大学から歩いて行けるところにこのような地域があることは、白毫寺町の旧集落が本学にとって財産であることを示してもよい。しかし、10年後、20年後も大和棟民家が現在のように多数維持され続けるであろうか。筆者は、この点には強い危機

感を抱いている。現存する大和棟のひとつをどこか適当なところに移築し、保存・再生する必要があると着想したのは、こうした現状認識による。

いっぽう、当センターの実習園は、この白毫寺町のはずれに位置し、社会的つながりとしては白毫寺町を構成する一員である。実習園の水田で使っている用水は、白毫寺町水利組合（現地呼称「耕地方」）が管理しているものである。しかし、実習園の建物は、地域性とは無縁の画一的なものばかりである。外観は背景の高円山には全くなじまず、景観的に著しく見劣りする。このような実習園に、もし伝統的民家を配置すればたちまち潤いのある風景が現出することは間違いない。

### 4. 教育利用および地域開放のプラン

移築した大和棟民家を再生し、教育利用に役立てるためには、和歌山地方の伝統的農村で普通に見られた生活が再現されることが望ましい。それには、再生民家に備わる要素として、和室や板の間を基本として、いろり、土間、かまど、風呂、井戸、物置などがほしい。かまどには釜も置きたい。その他に、

付帯要素として家畜小屋や水車も備わればいっそう充実するであろう。ただし、トイレだけは身障者も使えるよう近代的様式にしたい。

生活の再現として重要なことは、井戸で水を汲む、かまどで薪を燃やして飯を炊くといった、かつての農家で普通に行われていたことが毎日のように実行されることである。また、季節に応じた各種作業、例えば茶摘みに伴う製茶、梅干し作り、干し柿作り、味噌作り、もちつき、縄細工などが行われることも大切であろう。したがって、物置には、それらの作業に必要な道具とともに、味噌、梅干し、茶などの農産加工品類が樽や箱に入れられて収納されることになる。家畜小屋では、かつて農耕用のウシが飼われていたのでウシを飼えればよいが、ヤギでも十分に意義のあることであろう。

問題は、これらの仕事・作業を誰が行うかである。これには、二つの方向性が考えられる。ひとつは、学生や附属及び近隣小学校の子どもたちに授業の一環として体験してもらうことである。小学生の場合は、生活科や「総合的な学習の時間」に最適であろう。週末や長期休業期間中は、保護者とともに宿泊体験に利用してもらうのもよいであろう。夏期は蚊帳をつって寝ることになるのは言うまでもなかろう。薪で沸かした湯で入浴することも体験できよう。完全週休2日制になれば、週末をここで過ごしたいという希望者も増えてくると思われる。もうひとつの方向性は、地域住民の方々にボランティアとして参加してもらうことである。とくに、味噌作りや製茶などは技術・経験を要することであり、その意味では地域在住の年輩の方々に加わっていただくことが不可欠でもある。したがって、学生や小学生に作業体験してもらうにしても、その指導者は実際には地域のボランティアの方々となるのが現実的であるといえよう。

和室や板の間は授業や公開講座、あるいは各種の集会に活用されることになろうが、近隣地域の方々は、光熱費など実費のみの格安の料金で優先的に使えるようにしたいものである。先に述べたような宿泊についても、低料金による利用を可能にすべきである。なお、冷房装置は設置しないとしても、機能性を高めるために事務室、電話、パソコンを備えることは必要であろうし、防火設備などは最善を尽くすべきであろう。

以上のことから、大和棟民家を移築・再生後は、平日ばかりでなく休日においても利用が活発に図られるよう考慮すべきであろう。そのためには、管理・運営の主体を地域住民に委ねる必要があり、言わば全面的に地域に開放することが求められよう。願わくば、年間を通して少なくとも日中は誰かがいてくださり、突然の見学者や利用者が来訪しても受け入れられるようにしたいものである。

ところで、我が国の伝統的民家の屋根は、茅(かや)または藁で葺くのが一般的である。大和棟民家を移築・再生する場合も、できれば屋根は大和地方で多く用いられてきた藁で葺くことが望ましい。大和地方では、かつて麦を盛んに栽培していたため、藁は豊富であった。また、藁は自然環境に調和した素材である。夏の暑さや雨の音を和らげてくれる。しかし、藁屋根は、葺き替えに要する労力がきわめて大きい。材料自体も現在では集めにくい。それでも、材料さえ集まれば、屋根の葺き替え作業は学生や地域住民などに対して格好のボランティア活動の機会を提供することになろう。20年に1度程度であるが、大学および近隣地域にとって1大イベントになることは間違いあるまい。

## 5. 自然環境に調和した生活の再現の意義

大和棟民家の移築・再生が実現し、いままで述べてきたような活用が図られれば、それはかつての農村でごく普通に見られた生活、すなわち地域の自然環境と調和した生活が再現されることになる。それは、当センターの設置理念とも合致することであり、ひいては現在求められている環境教育の理念にも通ずることであると思われる。

当然のことながら、民家の移築・再生及びその後の管理・維持には、まとまった額の経費が不可欠である。おおよその試算として、移築・再生に関する経費が、物件の買取り・解体・運搬・設計・改装すべて合わせて8千万円ほど要するものと思われる。しかし、ここで述べたプランが実行に移されれば、再生した建物の稼働率はきわめて高いものとなり、教育効果も期待できるため、投資効果は十分であるといえる。

大和棟民家移築・再生構想に対して、学内外関係各位のご理解を賜れば幸いである。

(奈良教育大学社会科教育講座)

## 竹トンボ飛距離伸長の工夫

小柴幸文

### はじめに

十数年前になるだろうか、東芝機械のココム（対共産圏輸出統制委員会）違反が大きく報道された。詳しいことは忘れたが、自分なりに要約すると、次のようになるだろう。

東芝機械が輸出した工作機械が極めて優れていて、潜水艦のスクリューを削るのに用いられると、推進力の向上と、回転音の低減につながり、ソーナーによる捕促が困難となる。それでは、ICBMを搭載して海中を遊弋している仮想敵国の原子力潜水艦を識別することが困難になり、防衛政策に支障が生じるということである。

このことは防衛の技術的なことで、詳しく理解する術もないが、このことをヒントに自分なりに次のようなことに思いを巡らしていた。

- ① 船のスクリューのように長い歴史を持ち、形の単純なものでも、更に改良する余地があったのだなあとということ。
- ② 流体力学のようなことでも、研究する余地がまだまだあるのだということがはっきりとしたこと。
- ③ 70年前に親戚の奥田庄治博士が、まだ10歳に満たない私をとらえておっしゃった「当然と思って誰も疑わないことを疑ってみよ」という言葉の意味に通じるということ。

以上のようなことが、その後の竹トンボの改良に繋がり、新しい製法になっているのであるが、新しい方法を開発してからすでに五年になる。しかし、それからは一歩も進んでいない。とくに竹トンボ競技大会での日本選手権は、一度も手にしたことはない。そのうえ、誰もそれ以上に工夫をしたり、確実な理屈と製法を確立していない。折角の組織であるからには、その名の「日本竹トンボ競技普及協会」にふさわしい研究の成果を出すべきだと考えてみた。

### 社会一般の人達のこれまでの挑戦の軌跡

#### 1. 翼の長さを長くすること

この心理は、誰もが第一番に抱く気持ちである。

翼を長くし、幅を大きくして、速く一気に遠くまで飛ばそうとするものである。だから、このことについては、あらゆる人が挑戦したり、挑戦を試みようとしている。テレビなどでも、よく取り上げられている。

けれどもこれには次のような問題点がある。

まず、エネルギー源が一定（両手の掌のすり合わせのエネルギー）であるということである。エネルギー源が一定であれば、大きくて重くなれば、回転運動のエネルギーが相対的に小さくなり、距離が出なくなることになる。

2. 翼の材料に厚さのある物を用い、翼に与える仰角を大きくし、上昇力や推進力を大きくしようとすること

このことも、誰もがすぐに気づくことである。仰角を大きくすれば、螺旋の角度が大きくなり、推進力が増すという理屈になる。ヘリコプターの回転翼のピッチを変えて、急上昇をするのと似ている。

しかしこれには、次のような反対条件がつきまってくることは、容易に理解できるはずである。仰角が大きいということは、そのまま空気抵抗が大きいということを意味する。空気抵抗が大きいということは、翼の回転力を減殺し、飛行距離を縮めるということになり、折角の着想も打ち砕かれる。

3. 翼を薄く削り、重さを軽くするということ

このことはもっともなことのようにあるが、また大きな反対条件が立ち上がる。軽くすれば飛び上がり易いが、回転の惰力の貯蔵が出来ず、回転速度の消耗が早い。これでは、飛距離を競う競技には向かない。

4. 理想的な翼の形を探り出し、無駄な抵抗や渦流の発生を少なくすること

現在の研究の趨勢は、この方向に向かっているようである。コンピューターを使って、解析していきこうとすることで、多くの人に取り組んでい

るようである。しかし、これは私の能力の範囲を超えているので諦めることにする。

#### 5. 翼端を重くして、回転のエネルギーを持続させること

これも、従来から試みられた方法であるが、翼端の形を変えて鉛を埋め込んだりすることは、高速回転をする翼端では、動的バランスがとりにくいことと、高速で回転する翼端に鉛を埋め込むことは、きわめて危険であることもあって、勧められない。また、この作業は別の機械的条件が加わるので、竹トンボの領域を逸脱する。

#### 6. 材質を精選すること

一般の竹では、乾燥すると比重が小さくなり、水分や湿度の変化によるバランス、特に動的バランスの変化が大きく、安定した飛行ができにくい。

そこで、金属とか古い竹とか、外的条件の変動に左右されない材料を求める方向にはする向きも多くなっている。

しかしこれにも、障害条件がつきまとう。まず金属では、竹トンボという範疇から外れて機械の範疇に入る。また、古い竹となると、容易に入手できないので、条件に差異が生じて不公平を生じる。

#### 新しい視点から

千数百年の歴史をもち、遊びとしては莫大な数の人達に愛好されて今日に至っているはずの竹トンボであるから、そう易々と改善の余地が見つかるはずがない。といって拱手しているわけにはいかない。

そんなことを考えているとき、ふと閃いたことは、動物が走ったり飛んだりする速さということである。色々な動物のうち、最も速いのが蜂の一種であるということを読んだ記憶が甦ってきた。蜂であるからには、そんなに大きくは無いはずである。

そう考えると、次のことが見えてきた。

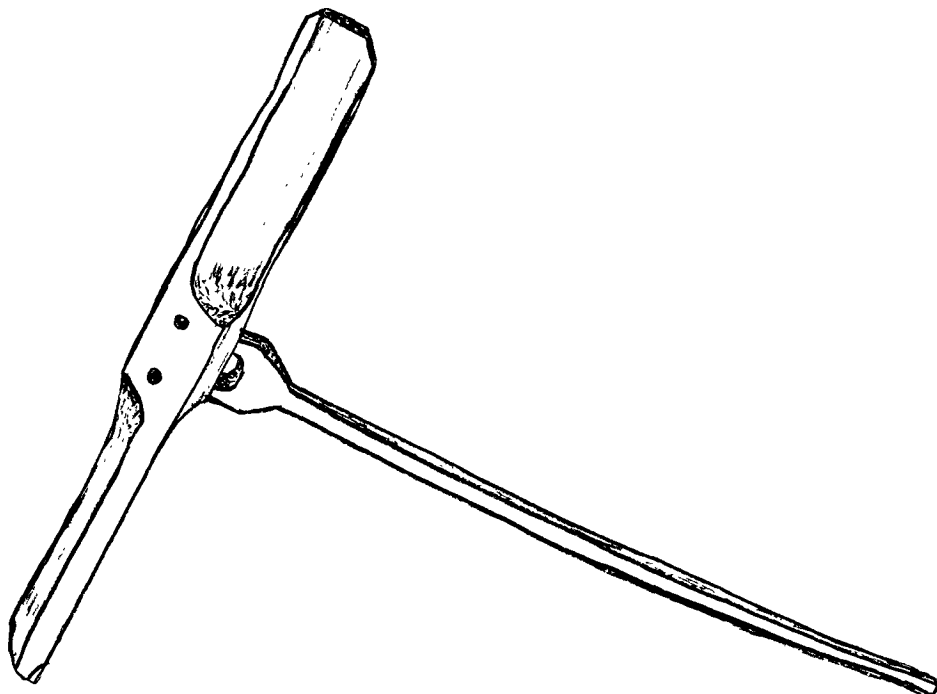
竹トンボは回転体である。回転体が飛ぶということは、中心点が移動するということである。中心点の移動ということは、翼の長さとは直接には関係しないはずである。翼の長さを短くして回転しやすくし、小さな蜂のように、素早い移動に重点を置いてみようということにした。

結果は予想以上に素晴らしかった。飛行の軌跡が直線に近いこと。だから、無駄な浮揚によって戻って来ないこと。距離が予期したよりも多かったことなどである。

#### 新しい竹トンボの製作法

##### 1. 翼の材料の選別と下拵え

特別な材料を使うわけではないが、六年もの以



上によくこびた密度の充実した竹の幹の、中央部分より株に近い部分から、10センチ余りを切り取る。それを幅1.5センチ程度に札に割る。割った札を、更に皮の部分が60%程になるように身の部分を割り取る。これは、密度が高く、重さも変動しにくい部分を使うためである。

その中央付近に、間隔を10ミリ程度にした孔を二つ明ける。二又の回転軸の差し込み用の孔である。

## 2. 削る

削るのには、次のような順序が普通である。

① まず、裏の右側から削る。(右利きの人)それが終わったら、上下を変えて、同じように、裏の右側を削る。

削りの瞬間には息をせず、一気に削ってしまう。そうしないと、削った面に凹凸が出来たり、繊維が立って、空気の抵抗が多くなり、回転を妨げることになる。細かい目の紙やすりで丁寧に磨き上げると、空気との摩擦抵抗が減殺される。

② 次に、表の右前を削る。続いて上下を変えてまた右前を削る。

このとき、裏を削る時とは違って、削り過ぎないようにして削りの余地を残しておく。これが後でバランスを整えたり、回転力の貯蔵のための重さを調節したりする余地になるわけである。だから、削ってしまえば取り返しがつかない。

## 3. 左右の翼の長さを揃える。

翼端から孔までの距離を測り、それに合わせて長い方の翼を剪定鋏で切り取る。

切り取るときは、剪定鋏の刃が翼の裏に当たるようにして切る。表に当たるようにして切ると、割れることが多い、切り揃えた後の全長は、8センチ以下くらいになるように切り込んでいく。

## 4. 調整をして、より適当な長さでバランスになるように調整する。

翼の四隅を切り、当たっても怪我をしないようにしておく。

何回も飛ばしてみて、個癖や飛び方を考えたり、削りを加えたりして、よりよく飛ぶように改良する。

## 更によく飛ぶ竹トンボにするために

一セットが出来たら、反省点を修正して、更に短く切り縮めたり、材料の厚さや幅を変えたりして、より良い竹トンボになるように製作に工夫を重ねて、新しい境地を拓いていきたいものである。更に研究を深めたいこととしては、次のようなことが残されている。

- ① 翼の長さとの割合の探求・・・経験的追求
- ② 翼の長さ、札の厚さ(仰角を決定する条件になる)・・・経験的追求
- ③ 乾燥した竹の比重の大小の影響・・・竹材の経過年数の研究
- ④ 翼の摩擦抵抗の減殺の方法・・・研磨又は塗料の研究
- ⑤ 回転軸の削り方の工夫・・・太さと丸さのこと・テーパー削りの工夫
- ⑥ 翼型の追求・・・経験的な試行錯誤による。無駄な空気抵抗やマイナスの渦流を起さない翼型発見の工夫、特に翼の表の削り方について、重さの残し方と翼の後方に生じる渦流の関係を突き止める。

(元教育資料館)

## 定年後の田舎暮らし（1）動植物の観察

北川 尚史

60歳ごろから研究にも教育にもいささか飽きてきた。大学の管理運営に関する仕事もうとましくなり、定年が待ち遠しかった。早く自由の身になり、好きなことを存分にやりたいと願った。役人生活の束縛を嫌って官職を捨て、農村で隠遁生活を送り、酒と菊とを愛した陶淵明の生き方に強く惹かれた。「帰りなんいざ田園まさに蕪れなんとす」の帰去来の辞の気概を持ちたいと思った。

6年前から退職後の住居は用意していた。奈良市に隣接する京都府相楽郡笠置町に小さな家を建て、在職中は別荘として使っていた。ほんとうは志摩半島あたりの海辺に住み、太平洋を眺め、海岸の生物に親しみ、新鮮な魚介類を食べ、魚釣りなどをして優雅に余生を送ることを望んでいた。いっそう日本を離れて、南太平洋の珊瑚礁に囲まれた島にでも移住し、ポール・ゴーギャンのように現代文明のしがらみから解放された、素朴で自由な生活を送りたいとも思っていた。

定年後の隠遁生活を夢見ていたが、いざその時になってみると、やはり友人知人たちと別れるのが辛かった。長年にわたって培った人脈を絶つことに不安があった。専門分野でやり残した仕事も多く、今後とも研究者として生き続けることに未練があった。あれやこれやで、長年住み慣れた奈良や京都から遠く離れて暮らすことのためにためらいがあった。

そして、昨春、いよいよ待望の定年を迎えて奈良教育大学を去ることになった。奈良産業大学に再就職したが、週に2日だけの勤めであり、毎週3時間の授業（同一の授業を3回）を行い、月に2、3回の会議に出ればよいという楽な仕事である（それに応じて給料も安い）。長年にわたる教育大学での生活を終えて肩の荷が下りたような安堵感があった。同時に新しい生活への期待感もあった。憧れていた田舎の生活が楽しみであった。私立大学に勤めるのは初めての経験であり、それへの好奇心もあった。

引っ越し前に書庫を建てた。通常の顕微鏡と実体顕微鏡を購入した。そして、自宅にささやかな研究

室をつくった。奈良の自宅と大学の研究室に置いていた1万冊を超える蔵書のうち、専門書を2階の研究室に、生物学関係の一般書と各種の辞書・事典を1階の書斎に、残りを別棟の書庫に収納した。採集や交換によって入手し、教育大学に置いていた3万点以上のコケの標本は昨年末に京大総合博物館の収蔵庫に移した。その後、たびたび京大へ行って標本の整理を行い、細々と専門分野の活動も続けている。

ともかくも、定年後の暮らしの基盤が整った。新しい生活のパターンが確立した。

### 付近の植生

わが家は比較的、自然に恵まれている。東側は山麓のスギ林、西側は川（白砂川）、南側は水田、北側は前田喜四雄さん宅に隣接している。西側と南側は視界が広く開けており、部屋の中で居ながらにしてさまざまな動植物を見ることができる。付近の山はいわゆる里山林が発達し、ヒノキ、スギの植林とコナラ、クヌギなどの落葉樹林が多い。よそではあまり見かけないナラガシワもあちこちに生えている。モウソウチクとマダケの竹林もこの地域の主要な植生の一つである。背丈の低い植物ではネザサとアオキが特に多い。ネザサは川の土手や河川敷、崩壊地など、明るい場所に大群落をなして生育している。アオキはこの地域一帯の森林の低木層を代表する常緑樹である。

わが家の庭だけでもいろいろな植物が生育している。試みに、昨年9月に庭の植物を調べて、そのリストを作成した。庭に生えている野生植物（維管束植物）は約120種であった。その季節には消え失せている春の植物を含め、年間を通じて調べれば野生植物は150種ほどになるであろう。畑の作物、植木、鉢植えなどの栽培植物は約60種であった。

付近の水田の畦道や土手にはリンドウ、ツリガネニンジン、ウツボグサ、ミソハギなど、都会の周辺ではあまり見かけなくなった植物がまだ残っている。庭にはノアザミ、ハハコグサ、コウゾリナ、ヨメナ、



ウマノアシガタ、オトギリソウ、レンゲソウなどの昔なじみの植物が生えており、私の田舎暮らしへの志向を満足させてくれる。

家のそばに川が流れていることが動植物相を面白くしている。この白砂川は夏の日照りにも涸れることはない。川幅は十数mで、ふだんの流れは4～5mの幅であるが、大雨が降ると川幅いっぱいの濁流と化す。川底には大小の岩があり、水がせき止められ、いつも瀬音を立てて流れている。川岸の土手にはネザサが密生している。その下の、増水時に水に浸かる部分にはツルヨシが、また水際にはネコヤナギが生えている。

### ウツギ、ヤマハゼなど

この地域一帯にウツギが多く、わが家の庭にも10株ほど生えている。いずれも自然に生えてきたものであり、5月下旬から6月上旬にかけてたくさんの白い花（卵の花）を咲かせる。そのうちの2本にはセンニンソウが絡んでいるが、このつる植物は8月に無数の白い花を咲かせ、ウツギの灌木の上に雪が積もったように見える。

庭に1本のヤマハゼがある。ウルシの仲間の落葉樹であり、これも自然に生えてきたものである。ヤマハゼの果実は熟してもくすんだ茶色で目立たず、乾いて堅く、鳥が食べそうにもないが、いろいろな鳥がやってきた。そしてジョウビタキが実際に食べるのを目撃した（他の鳥も食べたであろうが確認できなかった）。ウルシ属は鳥散布であると本に書いてあるが、ヤマハゼの種子散布はたしかに鳥によっていることを知った。

ウツギにもヤマハゼにも、その他の樹木にも、へ



増水して流れる白砂川（居間からの眺め）

クソカズラが絡み、秋にたくさんの小さな果実を生じた。冬に植物体が枯れるが、その枯れたつるに褐色の果実が長い間、ついていた。果皮の表面は褐色でつやがあり、中に2個の種子が入っている。種子のまわりの組織はみずみずしく、ピンセットで押すと多量の液が出てくるので鳥が食べるにちがいないと思って気をつけていたが、ようやく2月18日に2羽のヒヨドリがやってきて盛んに食べているのを観察した。

庭木のピラカンサに絡んだスズメウリが夏から秋にかけて数百個のみずみずしい白い小さな果実を結んだ。スズメウリの種子散布は鳥によるものと想像され、実際、そのたくさんの果実は次第に少なくなったので鳥が食べたのであろうが、その現場を確認することができなかった。

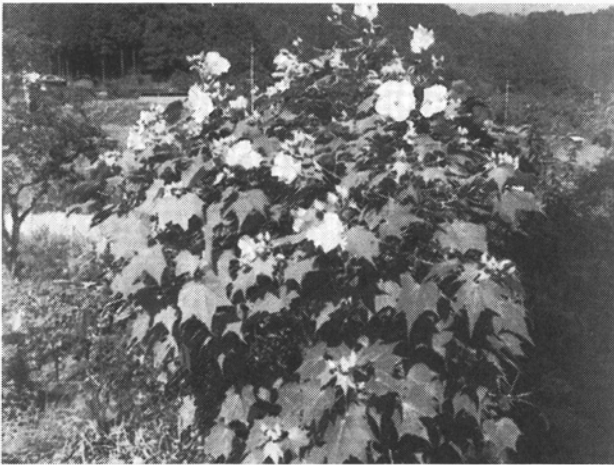
### フヨウとスタベリア

庭に3株のフヨウが植わっている。スイフヨウ（醉芙蓉）に近い品種であり、朝に咲いた純白の花が夕方には紅色となる。3株のフヨウは9月5日から10月末までに約700個の大きな花を咲かせた。花は多量の蜜を備えており、昼間はホウジャクの1種が、夜間はスズメガの1種が訪れて、花卉の間のごく狭い隙間に長い口吻を差し込んで蜜を吸う。ホウジャクもスズメガもかなり大形のガ（蛾）であり、前者は昼行性、後者は夜行性である。フヨウは朝に咲いて夕方にしぼむ一日花として知られているが、実際は涼しい季節（昨年のがが家のフヨウでは9月20日以降）には朝に咲いた花は翌日の夕方にしぼむ。さらに涼しくなると翌々日の夕方にしぼむ。したがって、その季節には花は夜にも半ば開いており、夜行性のガによっても受粉が行われるのである。3株のフヨウは昨秋、約250個の果実を生じた。このフヨウの花の構造や受粉について詳しく観察して、いろいろな面白いことがわかったので、その結果を奈良植物研究会の会報に発表した。

昨夏、義父の法事があり家内の実家へ行った。玄関先にスタベリアというガガイモ科の珍しい植物の鉢植えが置いてあったのもらってきた。一見サボテンに似た多肉植物であり、ヒトデのような気味の悪い大きな花を咲かせる。この奇妙な植物を本で調べてみたところ、アフリカ南部の乾燥地に自生するスタベリア・アステリアスらしいことがわかった。

この植物はわが家で9月から11月にかけて5個の花を咲かせた。花冠は深く5裂し、肉厚で紫褐色、表面には多数の微細な横縞があり、長い毛が生え、嫌な匂いを放つ。これはいわゆる腐肉花の一種であり、腐ってカビの生えた肉片の擬態であるとの解釈がある。

スタペリアの花はハエによって受粉する。この腐肉花にはハエが産卵し、ウジ（幼虫）がわくことは以前から知っており、教育大に在職中、専門科目の講義でもこの不思議な花の受粉に触れていた。しかし、それは机上の知識であり、実際に自分の目で見たことがなく、見たこともない事柄の説明には迫力が欠けていた。ところが、わが家のスタペリアの花にほんとうにハエがやってきた。ハエは家の中にも



庭のフヨウ（2000年9月20日）

入り込んでうるさく飛び回る普通のオオイエバエと青緑色の光沢をもつキンバエであった。咲いた5個の花のうち4個にオオイエバエが、1個にキンバエがやってきた。そして花冠上に産卵し、数十匹のウジが発生した（1例だけ約150匹のウジが発生した）。外国の本に書いてある通りであり、それを実際に見ることができて、いたく感動した。

スタペリアの花冠は腐肉のように見えるが、その表面は乾いており、ウジに与えるべき栄養を備えていない。そのため、ウジは花冠の表面をはい回るが、やがて力尽きたといった感じで次々と下へ落ちて行った。落ちたウジはアリがやって来て口にくわえ巣へ運んで行った。アリが花にまで上ってきて、花冠上のウジを直接、捕まえることも多かった。花はやがて花冠の裂片が内側へ強く曲がって閉じる。この閉じた花を調べてみたところ、雌しべや雄しべのある

花心部（この部分はたいへん複雑な構造をなしている）に液が満たされ、そこに大きく発育した10匹ほどのウジがうごめいていた。

このスタペリアは南向きの軒下に置いていたが、今冬の寒さのために死んでしまった。家内の実家（倉敷市）で軒下で育つものだから、水を与えず乾燥状態に保てば、わが家でも戸外で冬を越すと思って油断したのがいけなかった。この花に関してまだわからないことがたくさんある。ごく小さな蕾がいくつもついており、今年も夏から秋にかけて花が咲くはずであり、さらに詳しく観察して疑問を晴らすことを楽しみにしていたがそれができなくなってしまった。惜しいことをした。

#### ワタムシ、ゲンジボタルなど

昨年10月11日にセイボウ（青峰）を見た。青藍色のメタリックな輝きを放つ美しいハチであり、家内が2階の窓の外に落ちて死んでいたのを拾ったものである。図鑑で調べてみたところ、どうやらオオセイボウらしい。セイボウ類は他のハチに寄生するが、オオセイボウは果敢にもスズメバチの巣に穴をあけて侵入し、中の幼虫に産卵するという。10年ほど前に大阪市立自然史博物館でセイボウのコレクションの展示を見た。国の内外のたくさんの標本を集めたすばらしいコレクションに目をみはった。そのときから関心を抱いていたセイボウが現在のわが家にも飛来することがわかったが、実際に生きて飛んでいる姿をぜひ見てみたいと思っている。

庭ではさまざまなハチを見ることができる。スズメバチ類もオオスズメバチと少し小形の種がいる。アシナガバチ類も数種いる。8月中旬に盆休みで娘の一家が来たとき、2歳の孫が腕の数か所をアシナガバチに刺されて泣き叫び、木津町の府立山城病院へ連れて行った。どこに巣があるのだろうか、付近の植木や軒先などを探したが見つからなかった。後日、軒下に伏せて置いている植木鉢の中に巣をつくっており、ハチは鉢の底の穴から出入りしていることがわかった。アシナガバチは脚を斜め後ろに垂らして軒先などを伝って飛び、雨戸の戸袋や換気扇の中やガスボンベの後ろなどの狭いところへ行き当たり、悠然と大きく空を飛ぶことがなく、いかにもこせこせした印象である。

昨年12月10日、小雨の中、多数のワタムシ（綿虫）

が飛んだ。家の回りだけでも数百匹が数えられたが、それらは体のサイズに大小の違いが認められた。水っぽい白いものを抱えているように見えるが、小さな体にはそれが重たそうでゆらゆらと頼りなく飛ぶ。風に吹き流されるように飛ぶ場合もある。捕まえて顕微鏡で調べてみたところ、腹部の縁にびっしりと生えた蠟質の毛が白く見えることがわかった。ワタムシはユキムシ（雪虫）ともいい、昨春まで住んでいた奈良の自宅（奈良市高畑町）の小さな庭で数匹が飛んでいるのを何度か見たことがある。自宅から破石町のバス停までの道路で数十匹のワタムシを見たこともある。いつも小雨か雨上がりの曇り空のときであった。

白砂川にはたくさんのカワニナが生息している。そしてゲンジボタル（幼虫はカワニナを食べる）が毎年6月に川筋を飛び交う。昨年は5月30日に初めて見た。6月10日前後がいちばん多く、最後に見たのは6月27日であった。ホタル発生の最盛期に、部屋の電灯を消して眺めると窓の外は幻想的な光景であった。何匹ものホタルが光を点滅しながら、ふわーふわーとあるいはすーすーという感じで飛び、ゆっくりと川筋を往復している。光の点滅の間隔は規則正しく、複数の個体が近くを飛ぶ場合、点滅は同調している。川辺の草やヤナギにも光っている個体がいるが、それは雌であり、その点滅には規則性がない（盛んに飛んでいるのは雄である）。この川の下流に「わかさぎ温泉」という町営の温泉があり、たいへん繁盛している。しかし、温泉の付近にはホタルがほとんどいないため、入浴客たちがわが家の近くまで螢狩りに来る。

#### アオサギ、ムクドリなど

白砂川にアオサギがやって来て、流れのそばの岩の上にとまっているのを居間のガラス戸越しにたびたび見かける。アオサギはこの地域で見られる鳥の中で最大であり、飛ぶときは長い首を乙の字に曲げ、2本の脚を揃えて真っ直ぐに後ろへ伸ばし、羽根を大きく羽ばたいて悠然として飛ぶ。飛び立つと、川の上流または下流に向かい、川筋から大きく離れることはない。関西線の電車は笠置駅から次の加茂駅の手前まで木津川沿いに走る。私はこの電車に乗ると、いつも木津川の景色を眺めているが、アオサギが浅瀬に立って獲物をねらっているのをよく見かけ



稲刈り中の隣の水田（書斎からの眺め）

る。白砂川上流の須川貯水池でもアオサギを何度か見たことがある。わが家の下にやって来るアオサギは白砂川に沿って木津川と貯水池との間を行き来しているであろう。

昨年5月4日、田植えに先立って隣の水田が耕された。このとき、ふだんはあまり見かけないムクドリが6羽、どこからかやって来て耕運機の後ろについて歩き何かをついばんでいた。その後、よその田んぼや畑でも、耕運機による農作業が行われるときに気をつけて見ているが、しばしばムクドリが来ている。掘り起こした土の中のミミズや昆虫の幼虫などを食べているのであろう。草刈機で庭の草を刈っているときにも2羽のムクドリがやって来た。用心深く5mほどの距離を保ち、それ以上は近づかなかった。刈り終わった場所では草むらに隠れていた昆虫やクモなどを容易に見つけることができるので、この鳥はそれをねらって飛来するのである。ムクドリは人家の近くに多い鳥であるが、自分たちに餌をもたらしてくれる人間の行為をよく知っているようである。

今年2月18日、数十羽のエナガの群が川岸のイロハモミジとネムノキにやって来て、次々に川原へ下りた。そして、川岸の枯れたツルヨシや銀色の花序を出し始めたネコヤナギを伝って上流に向かって少しずつ移りながら何かをついばんでいる。川岸の枯れたセイタカアワダチソウやヨモギなどにもとまって、さかんについばんでいる。その後、同様な光景を何度も見たが、たくさんのこの小さな鳥によって川筋の彼らの餌場は繰り返すみずみずまでチェックされたはずである。エナガたちのこの行動は掃討作戦とか波状攻撃とか絨毯爆撃といった軍事用語を連

想させる。

### タヌキ

昨年の6月1日のことだった。そのころは昼間は暑いので日が落ちてから1時間ほど畑仕事をしてきた。川沿いの畑を耕している最中、タヌキが1匹、川筋から上がってきた。人を恐れる様子もなく、すぐ近くまでやってきた。試みにミミズを与えたところ喜んで食べた。その後も毎日、畑仕事をしていると、そのタヌキがやってきて、近くで腰を下ろし、まるで羊飼いの番犬のような感じであった。このタヌキは雌で、痩せており、背中から腰にかけて毛が抜けて、いかにも貧相な姿である。乳房が大きく、子どもがいるのかもしれないと思った。このタヌキはポン子と名づけられた。

畑で作業中、ミミズがすぐに手に入るとはかぎらないので、あらかじめ台所の残り物を餌として用意しておき、ポン子が現れるとそれを与えた。魚よりも肉を好んだ。牛肉や豚肉の脂身を特に好んだ。それを投げ与えると、だんだん近づいて、しまいには差し伸べた手のひらの上の餌を食べるようになった。5月に沖縄へ行き、酒のつまみにしようと豚の顔面の燻製を買ってきたが固くて食べられず、冷蔵庫に入れたままになっていたもので、それを小さく切って与えたところ、非常に喜んで食べた。果物や野菜は好まず、トマトとバナナは食べなかった。

6月9日、前夜からの雨で白砂川は増水し川幅いっぱいに濁流が流れていた。その日からポン子は姿を見せなかった。川岸の土手のどこかに巣をつくっていると思われるが、増水で巣が水に浸かって死んだのかもしれないと心配であった。しかし、6月15日に1週間ぶりに再び現れた。野生の動物は人間が心配するほどに愚かではなく、非常時の事態にうまく対応しているのにちがいない。その後も彼女との親密な付き合いが続いた。夕方ばかりでなく、昼間も現れるようになった。川に面した部屋のガラス戸のすぐ下にもやって来るようになった。戸を開けて部屋の中から餌を与えようとする、敷居に足をかけて上がってこようとする。しかし、癖がつくといけないので、部屋には上がらせないというけじめをつけることにした。

ポン子が馴れなれしい態度をとるのは、川沿いの畑と川に面した居間と台所の外であり、他の場所で

は態度が異なっている。玄関前で出会うと、横を向いて知らんふりをしてそばを通りすぎるのがおかしかった。若い女性が相手を見無視するかのよう、横を向いてフンとした顔つきをすることがあるが、あれと同じような感じである。近くの山際で出会ったときには、警戒して林の中にすばやく逃げ込んだ。

8月24日、ポン子がいつもの畑で1匹の子どもを連れて歩いているのを見た。彼女はやはり子持ちであったのである。子どもはすでにかなり大きく成長しており、母親よりも少しだけ小さい。餌を持って急いでその畑へ行ったが、子タヌキはすでに消えさせており、ポン子だけが待っていた。餌（豚肉の唐揚げ）を与えたところ、口にくわえて川へ下りて行き、またすぐにもどってきた。子どもに与えに行ったのにちがいない。その後も、何度かこの親子連れに出会ったが、子どもと一緒にいるときは警戒心が強く、いつもと様子が違っていた。

9月11日にまた大雨が降り、白砂川のふだんの穏やかな流れが逆巻く濁流と化した。ポン子はこのときも無事で、翌9月12日に姿をみせたが、子どもはいなかった。ポン子を見たのはこの日が最後であった。

6月にはポン子の体にしばしばヤエムグラの果実が付着していた。ヤエムグラの果実は直径が3mmほどで、先の曲がった短い剛毛を備えており、動物の体表に付着しやすい。哺乳類の体表にくっついて種子散布を行う植物は多い。わが家の付近でも晩秋から冬にかけての季節に草むら歩きすると、オオオナミ、アメリカセンダングサ、アレチヌスビトハギ、イノコズチ、チヂミザサなど、多くの植物の果実がズボンにくっつく。1年を通してポン子を観察し、



タヌキのポン子 (2000年9月3日)



実際に野生動物の体表に果実が付着する植物の記録をとろうと計画していたが、彼女の突然の失踪でそれを果たすことができなくなった。

### カメ

1998年9月21日に台風7号が奈良県を襲い、各地に甚大な被害をもたらした。奈良市高畑町のわが家でも大風が吹き、庭木の枝が折れたりしたが、この台風が通り過ぎた直後、家内が庭で大きなイシガメを見つけた。どこからやって来たのかわからないこのカメは、その後、わが家のペットとなり、すでに2年半ほど一緒に暮らしている。昨年9月20日には家下の白砂川で、ほぼ同じサイズのイシガメを捕まえた。両方とも雄であり、家内が亀吉、亀男と名づけて溺愛している。10月半ばから3月末まで何も食べず、糞もしないので、家の中で放し飼いでいるが、暖かいために冬眠をせず、ごそごとと部屋を這いまわっている。春から秋にかけては餌を食べ糞をするので水槽に入れたり、庭を散歩させたり、川で泳がせたりしている。家族の一員となったこの2匹のカメについては書くべきことがたくさんあるので、詳細は別の機会に譲りたい。

### 散歩

終日、家で過ごすときは、たいてい散歩に出ている。わが家の住所の草田切(くさたぎり)界隈を歩き、動植物の観察を行う。わが家は京都府と奈良県の県境に位置し、白砂川の対岸は奈良市広岡町である。十数軒の家が散在するこの小さな集落の中も歩く。以前は何しに来たのかと不審の目で見られていたが、最近は何し者ではないとの理解が得られたらしく、また来たかといった感じて受け止められているようである。

最近(2001年2月)、水道管敷設の工事に伴って、草田切から駅の方へ行く山沿いの小さな道が整備されて歩きやすくなった。この小道はしばらく林の中を通るが、スギとヒノキの林で、人通りのない静かな道である。センダン、ナナミノキ、シロダモ、アオキ、ヤブツバキ、サネカズラなど、田んぼや畑の土手などには見られない植物も生えており、私の散歩道の植物相を多様化してくれている。最近では駅や郵便局へ行く場合にも、いつもこの道を歩いている。

散歩の途中、歩きながら、いつもキョロキョロし



白砂川の対岸、奈良市広岡町の集落(居間からの眺め)

ている。何の花が咲き始めたか、何の鳥を初めて見たか、何の蝶を見たかなど、季節の変化を見逃さないように気をつけている。そして、日々の観察記録を日記に書いている。昨年末、博文館の当用日記を買い、正月から動植物に関する日記をつけている。1ページが1日分の日記であり、書きでがある。冬は自然の変化が少なく、書くことが少なかったが、ともかくもこれまでに一日も欠かさず記録してきた。1年間、記録をとれば、付近の主要な動植物の季節変化を把握することができるはずである。

山沿いの林の中の道を通り抜けて、田んぼの中の道を進むと、やがて「わかさぎ温泉」という町営の温泉の前に行き着く。その1階の喫茶・レストラン「オオルリ」でしばしばコーヒーを飲む。ビールを飲むこともある。昼間から温泉に入ることもある。数種類の温泉にゆったりと浸かり、サウナに入ると、身体がふやけたようになり、精神もなにやら朦朧としてくる。

現在の自分が過ごしているこのような生活を日々是好日と表現するのだと思う。それは古い中国の禅問答に出てくる意味深長な言葉らしい。しかし、私は、日々是好日を、半ボケ老人を傷つけないために、その弛緩した生活を婉曲に表現したものであると思っている。

(奈良教育大学名誉教授)

## 「馬」と「鹿」の分布考

—「探偵ナイトスクープ」を論じて、自然科学者のあり方に及ぶ—

玉村 公二彦

憩いの一時のこと…

自然環境教育センターといっても、大塔村でも、実習園でもなく、大学院棟にある自然環境教育実習室でのことであるが、いろんな人が出入りして、憩いの一時をおくる。そんな中に、T芸家のYさんと専門はまるでちがうTがいる。この二人、この実習室を喫茶店代わりのだべりの場所としているのが常である。21世紀を迎えた1月、いつものように、YとTがやってきて、M先生にコーヒーなどをいれさせていた時のことである。

Y「そういえば、先週の探偵ナイトスクープで、『中国高級料理の蚊の目玉のスープを食べたい』ってのがあって、コウモリの糞の中に蚊の目玉が入っているらしいというので、コウモリの糞をコウモリ小屋に取りに行ったというのがあったなあ」

M「……」(無言)

Y「そうそう、コウモリの話だからてっきりMさんが出てくるもんと思っていたんだけど？」

M「…実は…朝日放送から電話があったの！」

T「へえ、やっぱり。なんといってもコウモリはMさんしかいないもんね。でも、Mさん出てなかったじゃん」

M「そんなもん知るかよ。糞の中の蚊の目玉をさがしてくださいなんていわれても、どうやって識別するのかって…。断っちゃった。」

それを聞いたYとTは、「大学からの情報発信」やら「大学が地域に開かれたものにならなくっちゃいけないのになんたること」などあらん限りの理屈をつけて、M先生を難詰しはじめる。防戦一方のM先生は、それでも「でも、岐阜の人を紹介してやったから僕の役割は果たした」と強弁している。

実は、自然環境教育センターへの探偵ナイトスクープからの依頼はこの時が初めてではなかった。3～4年前、奈良山間部に居住の方から「天井裏に何かいるので、正体を明らかにしてほしい」という依頼があり、朝日放送から自然環境教育センターにその正体を見極める依頼があったのである。その時も、

「自然環境教育センターをなんと心得る」といわんばかりに、M先生は断ったのである。篤志の研究者の協力を得て、数日の夜中の調査によって、結局それはムササビの一家だったとわかって一件落着だったのだが、YとTがM先生の断りの顛末を聞きつけるや、ゴウゴウの非難をしたことがあった。M先生は「その正体が一聞してムササビだと断言できるのに、なぜわざわざ時間を費やしてまで協力しなければならぬのか？ 奈良で開催されるコウモリフェスティバルの準備で忙しかった時に、／」と弁明に終始したが、すかさず「コウモリフェスティバルの宣伝をするのもってこいのチャンスを逃した」ととどめの一発を受け、あえなくM先生は口をつぐみ、ようやく自分の狭量を反省する弁を口にしたのだった。しかし、この反省が口先だけのものではなかったことが、今回の一件で明らかになったのである。

一連のM先生の発言からすると、早寝のM先生はこの「探偵ナイトスクープ」という番組を見たことがないということ、そして、M先生はこの探偵ナイトスクープの要請をなんら学問や科学とは関係のないものと考えているらしいということが、今回の一件を含めた「お断り」の一因ではないかと思われる。要するにM先生には「探偵ナイトスクープ」に対する誤解や偏見があるのではないだろうか。

「探偵ナイトスクープ」は学問・科学と無縁か？

「探偵ナイトスクープ」は、毎週金曜夜11時過ぎから朝日放送で放映されている。関西では「おぼけ番組」とよばれる高視聴率を誇る番組である。「視聴者からの依頼にもとづいて、この世のあらゆる謎や疑問を徹底的に究明する」をうたい文句として、1988年から放映されてきた一種の謎解き番組であり、庶民の意識調査番組であり、依頼からその「解決？」までの視聴者参加の番組である。初代局長は、上岡竜太郎であったが、突然の辞任を受け、21世紀を迎え、新たに西田敏之が新局長に就任している。

基本的な番組のコンセプトは、素朴な疑問や問題

を取りあげ、その疑問・問題を「科学」的に追求する、それも疑問や問題をもったものが主人公となり、その解決を探偵が援助するというものである。こうした取り組みは、果たして現代の高度に発達した科学や学問とは別ものなのか？ そうではあるまい。

この姿勢は、素朴ではあるが科学と教育の原点ではないだろうか？ 上岡竜太郎前局長の「つつこみ」は素朴な疑問を洗練させ、探偵の問題追究の姿勢を問うものとなっており、示唆に富むものがあった。それに比して、新局長の西田敏之現局長は、探偵をほめておだてる才に長けており、対比的な姿勢が際だっている。しかし、一言ここで辛口の批評をさせていただければ、現局長のつつこみは甘く、疑問を広げ深めるという迫力を欠き、探偵の「おべんちゃら」に乗って、探偵をいたずらに甘やかしているという批判もないではない。再度、「探偵ナイトスクープ」の初心に帰ることを新局長にはあえて進言しておきたい。

いずれにせよ、この番組は、科学や学問やその方法といったものを考え直すよいきっかけを与えてくれるのではないかと思われる。この番組の初心ともいえるものを典型的に示すものが、「全国アホ・バカ分布」を探求したものであったと思われる。幸いにも、この番組の生みの親である松本修氏によって、『全国アホ・バカ分布考』（初版は1993年に太田書店より出版、現在は新潮文庫として1996年新潮社より文庫化）として上梓され、探求過程にふれることができる。

最初に放映されたのは、1990年1月。そもそもの発端は、次のような依頼だったという。

「私は大阪生まれ。妻は東京出身です。二人で言い争うとき、私は『アホ』といい、妻は『バカ』と言います。耳慣れない言葉で、お互い大変に傷つきます。ふと東京と大阪の間に『アホ』と『バカ』の境界線があるのではないかと気づきました。地味な調査で申し訳ありませんが、東京からどこまでが『バカ』で、どこからが『アホ』なのか調べて下さい」

この調査を請け負ったのが、なにをやらせても中途半端と評価が低い探偵の北野誠だった。最初は、東京から大阪までの主要な駅で、アホなことをやっ

てどんな言葉を使うかを調べ、「バカ」と「アホ」の境界を確定させようとする安易な試みだった。それはそれでおもしろかったのだが、上岡局長から「中途半端」と指摘され、再調査を命じられてしまう。再調査を契機に、全国アホ・バカ表現の分類と分布調査となる。はじめは視聴者へのアンケート調査、それから全国市町村の教育委員会へのアンケート調査、また、歴史的な使用方法についての古辞書類・文献の渉猟へと発展し、そして結果の分析、最終的には学会発表を経て報告書の作成まで至っている。これは、民族学・言語学などへの研究・学問的貢献といって過言ではない。この分析にあたっては、民族学・言語学研究者の援助があったことはいまでもないが、屁理屈の好きなM先生からは「人文系の科学・学問ではそんなこともある」という主張がなされるかもしれないので、一言二言つけ加えたい。

確かに「アホ・バカ」分布は、言語の伝搬を扱ったものである。しかし、そういう当のM先生も、コウモリに対するイメージ調査を行い、そのイメージの悪さを問題にした経験がある。曰く、「ドラキュラの映画の影響以降、日本人のコウモリに対する好感が180度変えられてしまった、これは西洋文明による日本文化のゆがみ現象であり、もともとコウモリはかわいい・よい動物なのである」「コウモリは人間にとってとても役に立つ動物である。みんなよく知らないで、コウモリのことを気味が悪いなどいっている」と。かわいいコウモリ像の普及に全力を傾けるM先生の姿勢は、「探偵ナイトスクープ」の姿勢と重なるものがある。つけ加えていえば、洞窟のコウモリの写真をとって、それを引き延ばしてどのくらいコウモリが生息しているかを丸印をつけながら一生懸命数えているM先生の姿は、「アホ・バカ分布図」をつくっている「探偵ナイトスクープ」製作陣と重なり合っている。

#### 「馬鹿」考—動物と言葉の関係

人をコケにするときに植物や動物をもじるということをよくやる（「コケにする」という言葉自体もそうになっているが）。植物でいえば、「かぼちゃ」「ぼけなす」「ピーマン」等などがあるし、バカだつて「馬」に「鹿」である。

『アホ・バカ分布考』でも、「馬鹿」の語源につ

いて一端を検討している。「バカ」を「馬鹿」と書くのは実は、理由のないことではなかったようだ。広く知られている俗説は、史記からきている、「鹿をさして馬という」という故事説である。その説とは別に、バカの類語として「タクラダ（田蔵田）」というものがあることに着目したい。『アホ・バカ分布考』の中に、「中世の間抜けな動物たち」という項があり、「タクラダ（田蔵田）」の紹介がある。「田蔵田」とは、室町時代の京都人が、中国に生息していると信じていたと言われるジャコウジカ（麝香鹿）に姿形がそっくりな動物のことである。中国にそのような動物が本当にいたのかどうかは定かではないが、香料の原料として珍重されたジャコウジカを捕ろうとして、ウロウロしていた田蔵田が間違えて猟師の手に落ちるものの、用なしで捨てられてしまうということである。自分からわざわざ殺されるために出てくる田蔵田は、まさに愚か者ということで、「タクラダ」はバカを示す言葉となった。この田蔵田は、中国において確認されているわけではないが、「キバノロ」という角がなく牙をもつ小型の鹿がジャコウジカと似ていて、分布域も一部重複しており、実在のキバノロのことかもしれないとこの著者は推察している。考えてみると、角がない鹿は、馬と似ているともいえないことはないだろう。馬と鹿の両者の特徴を備えたものが、田蔵田だったのかもしれない。とすれば、愚か者のことを田蔵田という架空の動物の名前を使って示してもわからないので、その動物の特徴を示す馬鹿が言葉として使われたと考えるのも不思議ではない。

こうした動物をもじった、この種の類語を探してみると、「トンマ（豚馬）」というものもある。残念ながら、『アホ・バカ分布考』では、この豚馬については、採集されたものが少数であったのか、馬鹿との関係なども含めて検討されていない。もしかしたら、ブタとウマの掛け合わせにまつわるおもしろい物語があったかもしれない。その追求がなかったのは残念としか言いようがない。

いずれにせよ、両者に共通するのは「馬」であるが、最終的に『アホ・バカ分布考』の著者が推論する「バカ」の語源は、白楽天の漢詩（「傷宅」）にある「馬家の宅」（奢り高ぶった末に落ちぶれてしまった高官の邸宅）が源であり、「破家」にいたる「狼藉者」から来たものという新説である。この著者、

「馬鹿」の故事説  
 一横山光輝『史記』⑨小学館より





「オオカミ（狼）」との関係も考慮に入れて、「馬家」と「狼藉」との関係も一考しているところが周到である。

「鹿」「馬」「狼」ついでに「豚」まで含めて、アホ・バカ動物の輪に興味は尽きない。ちなみに、田藏田と同様、アホ・バカの類語に「アンゴウ（鮫鱈）」という言葉も採集されていたが、この言葉は深海魚のアンコウ（鮫鱈）を指しているのではなく、両生類の山椒魚を示したものであり、「口を半開きにした山椒魚のように間抜けなやつ」という意味であった。『日本国語大辞典』はじめ、深海魚の鮫鱈として解釈しているものがあるが、動物学に疎い言語学者の存在が指摘されており、専門バカの視野の狭さに猛省を促している。しかし、言語学などとの交わりをしてこなかった当の動物学者の怠慢もまた、その狭量さを含めて指摘されなければならないだろう。

#### 「探偵ナイトスクープ」への素朴な疑問と提案

日常の様々な疑問や探求は大いに奨励されるべきはないだろうか？素朴な疑問がやがて大きな発見や業績につながっていったことは、これまでの科学の発展の中で多種多様な実例を見ることができる。最近においても、自然科学の分野では、実験の失敗が新しい物質の生成を可能としたとか、学生の思わぬ発想が超伝導の物質を発見する契機となったというような話題があった。こうした例は、極端なものであるかもしれないが、しかし、そこからわれわれは学ぶことはないであろうか？

自然科学、社会科学、人文科学などなど科学と名がつくものに携わっているものとして、あるいはその教育に携わっているものとして、いかにアカデミックな業績とかけ離れているとしても、素朴な疑問や探求をないがしろにしてはならないのではないだろうか。「アホ・バカ分布」の検討にあたって、当時大阪大学の言語学者徳川宗賢氏をはじめとして多くの言語学、国語学者の協力があり、その研究者との接触によって「学問する敬虔な精神」をテレビマンであった筆者松本修氏は学んだと述べている。自然環境教育センターの方々も、市民の疑問に引きずり回されることを恐れずに、少なくとも「探偵ナイトスクープ」くらいには協力するゆとりがほしい。とはいえ、「この世のあらゆる謎や疑問を徹底的に究明する」といううたい文句の「探偵ナイトスクープ」

自体にも、いろんな謎や疑問があるのだが、視聴者としてその一端をいくつかあげておきたい。

「アホ・バカ分布」と関連しては、「豚馬」はどんな動物か？「間抜け」の「ま」はなにから抜かれるのか、もともとこの「間」は「馬」のことだったのではないのか？等々、疑問はつきることではない。

探偵や製作陣に関連する疑問もたくさんある。「アホ・バカ分布」で活躍した北野誠探偵は、その当時は「中途半端」と酷評されていたが、10年も探偵をやってきてその「中途半端」はなおったのか？どうも、「中途半端」はなおっていないと思われるのに、顧問のキダタローはじめ北野誠の探偵ぶりについて評価が甘くなったのではないだろうか？また、『アホ・バカ分布考』を読むと、著者の松本修氏は独身だと読みとれるのだが、その後、結婚したのだろうか？それともそのままなのか？そのままだったら、きっと「ラブアタック」でむごい企画をしたことがたたって、女性像にゆがみがでているのではないかと思うのだが、どうだろうか？

また、「アホ・バカ分布」の探求に登場し、協力を惜しまなかった研究者たちが、この「探偵ナイトスクープ」に協力したのはなぜか？それでどうなったのか？も知りたいところである。それは、どうしたらM先生のような取材拒否を防止し、より豊かな探求ができるのかという教訓を引き出すものとなるう。

以上は「アホ・バカ分布」に関連しての素朴な疑問だが、それで終わりではない。本稿執筆のもともとの理由は、M先生の「探偵ナイトスクープ」への偏見をどうやったら取り除けるかということであった。この趣旨から、小ネタながらいくつか提案をしておきたい。

まず、桂小枝探偵に、M先生宅をターゲットに「視聴率調査」をやってもらいたい。M先生に、なにがなんでも、「探偵ナイトスクープ」を見せないと収まらないではないか…と思うのだが、どうだろうか。ちなみに、『アホ・バカ分布考』の文庫化を祝して書かれた秘書の岡部マリさんの一文によると、ABC朝日放送から「探偵！ナイトスクープ全国アホ・バカ分布図の完成」というビデオが出されているという。「探偵ナイトスクープ」が学問とかけ離れているという偏見をもつM先生に、製作陣の爪のあかを煎じて飲ませるという意味で、少なくともこ

のビデオをみせることは考えておく必要があるだろう。

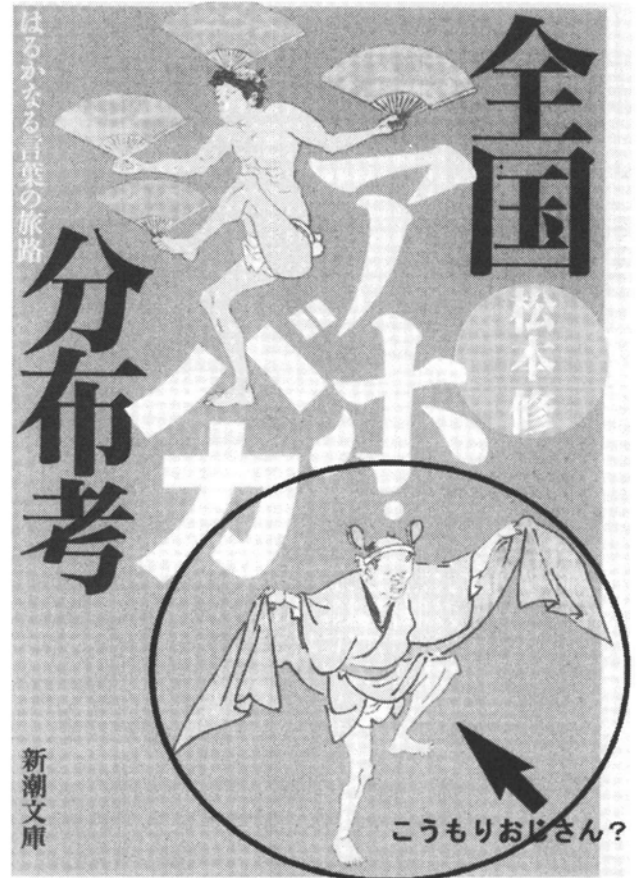
頑固で自分の非を認めないM先生のことであるから、最後の手段も用意しておく必要がある。これは難題だと思っている矢先、『全国アホ・バカ分布考』の新潮文庫版のカバーが目をついた(右)。「戯筆酒席芸尽」からとったカバーだが、二人のアホ・バカの者のうち下のものに、頭にしゃもじを二つつけ、風呂敷をマントのように背負った姿があるではないか。この絵は、どう見ても、コウモリのまねをしているアホな図である。NHKの「おもしろ学問人生」という番組で、M先生が取りあげられたとき、コウモリの格好をしてアホな姿を演じたM先生である。この「戯筆 酒席芸尽」の絵の解釈をお願いするにはぴったりの役柄ではないか。

世の中には、真摯な研究者もいるだろう、しかしちょっとひねくれた研究者も大勢いる。探偵ナイトスクープの製作陣の方々、そうしたひねくれた研究者も少しばかり狭量なだけで、良心がないということではないということを忘れないでいてほしい。M先生に断られたのは、たかが2度じゃないですか。これからも、いろんな疑問を、M先生に問い合わせて、その頑固さを柔らかくしてやっていただければと、心底思う。

蛇足ながら、「探偵ナイトスクープ」には「アホ・バカ研究者」の全国的な分布図もつくってほしいものである。

(「探偵ナイトスクープ」愛好会奈良教育大支部支部長)

(奈良教育大学障害児教育)



## 私のマラソン

前田喜四雄

今季もまた、途中でリタイアしてしまった。2月の末に岡山で行われた吉備路マラソンに参加した。しかし、24kmで走るのを止めたのである。10kmを予定どおり快調に通過し、アレッ！昨年よりも調子がいいのでは！と思った。15kmをすぎても好調であった。昨年はこの辺りからへばり気味であったような気がするなどと一年前を振り返りながら走っていた。今年は昨年のように、雪が横なぐりに降ってくるということもないであろう。特に暖かいわけではないが、通常の2月末の気候であった。この分だと、今年こそは完走できそうだとさえ思った。16km地点では、路上に落ちているドングリを観察しながら、たしか去年はアラカシのドングリが多かったはずだが、今年はアベマキ（クヌギの近縁種）のドングリが多い、どのようなことが原因でこんな違いができてきているのかと考えるくらいにゆとりがあった。さらに、アッ、今年はヒバリがさえずっている。去年は気がつかなかったのに。また、ジョギングもやはり環境教育と深く結びついているのだとも考えていた。しかし、17kmくらいで右の膝に変調を来した。その膝の様子をみながら、少しゆっくり走った。最初はゆっくり走ると膝の違和感は通常に戻った。そこで速度を元に戻すとまた同じような違和感が膝を襲った。

その不安は走る前からあった。マラソン本番の8日前に最後の長距離の練習をした。大学構内の一周750mある周遊道路を走った。目標は30周であった。合計20kmを越える練習がしたかった。その1週間前にも同じコースで練習した。20周が目標であり、イメージ通りに15kmを走り終えた。この時は全く膝に異常はなかった。ところが30周を試みたこの日には17週目で右膝に違和感をおぼえた。すぐにやめるべきだったが、せめて20周はと、速度を少し落として走り続けた。18週目でその右膝が痛くなった。しまった！と思ったが遅かった。その後、本番4日前に不安を解消しようと、舗装道路ではない、土のグラウンドで4kmをゆっくり走った。膝は大丈夫であった。

膝は回復したと解釈した。しかし、甘かったのである。マラソンコースのすべては足にかかる体重の負担が大きい舗装道路である。

それならばと思いきって、今度は走るのをやめて歩き出した。昨年と異なり、歩いても寒くない。少し早足でしばらく歩いた。これくらい歩いても、制限時間の5時間内で十分完走できるはずであった。しばらく歩いた後、また走り出した。治っている。喜んだ。しかし、少し走ると、また違和感が膝を襲った。しかたなくまた歩きだした。少したってまた走った。歩いた後しばらく足は大丈夫であったが、やはりまた膝に変調を来した。しかも歩いた後膝に違和感をおぼえる距離がだんだん短くなっていった。しかも、膝の違和感が痛みに変わった。止めようかどうしようか悩んだ。それでも20kmはすでに過ぎていた。これまでの走り方を変えてみた。スキップしながら走ったり、左足で前にステップをして、右足をあまり前に出さないようにしたりもした。これだと膝が痛くなかった。この方法もついに限界がきた。左膝も違和感をおぼえるようになった。万事休すである。後はどこで中止するかである。20kmをすぎたからずっと田圃の中の道であった。公衆電話もない。そこで、のんびりと歩いた、歩くと膝は全く痛まない。少ししゃくにさわる。

このマラソンはいわゆる吉備路がコースになっている。まもなく吉備津神社であった。そこは観光地になっており、土産物屋や食堂があるのを知っていた。したがって電話があるはずだと思ってここまで歩いた。その直前に係員が数人立っており、しきりに応援をしてくれた。しかたなくその前だけ無理をして走った。やはり痛みが戻った。このマラソンコースは私の実家のすぐ近くを2回走るように設定されている。1回目は11km、2回目は36km地点にあたる。1回目に応援してくれた姉が実家にいるはずであった。電話で迎えを依頼した。まだ、昼食前であった。回収してもらった後、実家で一緒に昼食をした。ビールも美味しく飲んだ。しかし、こんなはずではなかつ

た。実家でみんなと一緒に昼を食べるなんて。昼食後、車で出発点に荷物を引き取りにいった。アー、今年も完走はできなかったのだ！

そもそも、何でマラソンに挑戦したか？昨年36kmまでしか、行けなかったからである。また、92歳になる母のところに戻るのに、何らかの理由づけが欲しかったことも大きな要因であろう。昨年は準備を十分したつもりでいた。しかし、15kmあたりから走るのがイヤになり、体がだるい感じの中を耐えて走った。25kmをすぎて、それに耐えられなくなった。しかたなく歩いたり、走ったりした。その日はこの季節としては珍しく強い冬型で、北風が非常に強いばかりか、雪が舞い飛んでいた。歩くと寒くて我慢ができなかった。3月初めに奈良県南部で行われたマラソンに参加したことがあり、その時はポカポカ陽気であった。それが頭にあり、またスタート時には太陽が顔を出していたので、この時はうかつにもジャージのズボンやウインドブレーカーを出発点に置いて身を軽くして、Tシャツと短パンで走り出したのである。後の祭りであった。歩くと寒くて我慢ができない。しかし走り続けるだけの精神力はない。それでも何とか、私の実家のすぐ近くまでたどり着いた。36km地点である。しかも時間は4時間しか経過していない。あと6km歩くことを我慢すれば5時間の制限時間内の完走が待っていた。応援をしていたみんなは後6kmだよとしきりに声をかけてくれた。しかし、私は寒さに耐えられなかった。というより多分寒さで気力を失っていたのであろう。その実家

そばで待っていた妻と義姉に回収してもらった。初めてのマラソンの途中リタイアであった。

さて、来年はどうしよう。昨年は寒さに負けたともいえるが、本当は走る気力をなくしたのが原因であろう。全体の練習距離数が多かったと思う。しかし、長距離の練習はほとんどしていなかった。ジョガー（走ることが好きな人）がよく読む月刊誌を最近読んだら、マラソンで完走を目指すならば、短距離で回数を多くするよりも、長い距離の練習が必要だ。血中のグリコーゲンの欠乏の状況を、体におぼえさせることが大切だと書いてあった。真にうける私は今回のマラソンに備えて、合計練習量は前年よりも多分短かったが、そのような練習にした。しかし、結果は膝を痛めて、あっけなくリタイアしてしまった。後は、膝の負担を軽減する「高価なマラソンシューズ」を購入するか、体重を落とすかであろう。来年も挑戦するかどうか、悩むのであろうか。まあ、年老いたお袋にでもまた会いに行こうか！

こんなことまでして、私はなぜマラソンに挑戦するのであろうか？多分、マラソンは自分の足を一步一步、まさに一步一步確実に進めなければ、ゴールに行き着けないからであろう。距離が短ければ、跳んでも行けるだろう。しかし、距離が長くなると、動くのが本当にイヤになる、腕を振るのさえイヤになるのである。それを越えなければゴールは待っていない。誰も途中で助けてくれない。自分を信じて一人でがんばるしかないのである。

(奈良教育大学自然環境教育センター)

## 編集後記

今年度も公開講座で食文化をとりあげました。前회가春から初夏にかけてだったので今回は秋に行いました。キノコ、ドングリ、トチモチ、どろイモ、ソバと楽しみました。また、恒例となっている「親子の米作り体験教室」や「夏の実習を親子で楽しもう」も順調にこなしました。さらに自然教室として2回もチーズ作り講習会を行いました。おかげでこれが発展し、ついに次年度には、公開講座「乳と醗酵—乳の科学と微生物、様々な醗酵乳製品」として、6回シリーズで行われる運びになりました。

本冊子には、大学の地域開放についての斬新なアイデアである、岩本先生による「大和棟民家を奈良実習園に移築して、これを市民の人と共同で運営していく」という構想について、また恒例となった小柴先生の竹とんぼについて、定年後を悠々と暮らしている前自然環境教育センター運営委員の北川先生にもその後の暮らしぶりについて書いていただきました。原稿をいただいた皆さん、どうもありがとうございました。

(前田喜四雄)